



## 「瞳を閉じて」

私は、高校三年の時に一枚のレコードを買って、何回も何回もその歌を聞きました。荒井由実の「翳りゆく部屋」です。ラジカセをもって登校して、放課後の誰もいない教室で聞き入っていました。

この歌の前奏はパイプオルガンの荘厳な響きではじまります。教会をイメージする神聖な空気の中で、大切な人との愛が壊れていくのを、夕暮れの部屋で彼女は感じ取っていきます。「どんな運命が愛を遠ざけたのか」と彼女は運命というどうにも修正のできない言葉で説明しようとします。そして、「輝きは戻らない」と言い切ってこの歌は終わります。淡い恋に揺れ動いていた当時の私にとっては衝撃的な歌でした。去っていく女性を繋ぎ止めることはできない。それは「運命」だから、そして「輝きは戻らない」と言い切るこの歌は何か今までの歌とは異なる、荒井由実の自由を求める気持ちを感じました。そして、「運命」「輝きは戻らない」という何度も繰り返されるこの歌詞が、高校生の私の心の中に入り込んでくる詞でした。

荒井由実の音楽は、ニューミュージックと呼ばれ、作詞、作曲も自分で行い、コンサートを中心に自分の世界を広げていきました。ロックやフォークソングを自由に受け入れて、今までない音楽を作り上げました。多くの大人たちは、若者の音楽を理解することはできませんでした。ロックはただの騒音で、音楽として認めることができませんでした。フォークソングもアーティストが表現する歌詞が反社会的であると批判されることも多かったです。事実、私が中学生の時は、文化祭でロックを演奏することが、禁止されました。給食時の放送では、フォークやロックだけでなく一般的な歌謡曲までも教育現場にふさわしくないと禁止されていました。私の中学、高校生の時の若者が聴いていた音楽は、大人にはなかなか受け入れられなかつたと思います。

1973年に、長崎の五島列島にある県立奈留高等学校（当時は分校）の生徒が、ラジオ番組に「私たちの学校の校歌を作ってほしい」と投書しました。これを受け、まだ有名でなかった荒井由実が校歌を作ることになりました。

奈留高等学校のある奈留島は人口3000人を下回る離島です。高校を卒業するとほとんどの若者が進学や就職で島を離れていくそうです、そんな島の状況を荒井由美は、故郷や母校を思い出してほしいという願いを込めて「潮騒の手紙をガラス瓶に入れて海に流そう、それをどこかで受け取ってほしい。どんな時も五島列島を取り囲む綺麗な海の色を忘れないでいてほしい。そのため瞳を閉じて心の中に全てを焼き付けよう」と優しい口調で校歌を歌い上げました。素敵な詞だと思います。そして素敵なものメロディーだと思います。しかし、この歌（瞳を閉じて）は県立奈留高等学校の職員会議で校歌に採用することを認めることはませんでした。

その後、荒井由美は結婚して松任谷由美と名を改め、次々にヒット曲を生み出し、日本を代表する国民的なミュージシャンに成長しました。そして、校歌として作った詩は「瞳を閉じて」という曲名で彼女の代表的なヒット曲となりました。1996年には高等学校の音楽の教科書にも掲載されて、日本中の高等学校で歌われる曲となりました。

現在、当時の学校の先生方が、瞳を閉じて、心の瞳を開けたら青い海が見えると思います。瞳を閉じて、考えられる心を人は忘れてはいけないと思います。

\*明日の給食時の放送で、「翳りゆく部屋」と「瞳を閉じて」を情報委員会にリクエストしますので、瞳を閉じてこの二曲を聞いてみてください。

風がやんたら 沖まで船を出そう  
手紙を入れた ガラスびんをもって  
遠いところへ行った友達に  
潮騒の音がもう一度届くように  
今 海に流そう

霧が晴れたら 小高い丘に立とう  
名もない島が 見えるかもしれない  
小さな子供にたずねられたら  
海の碧さをもう一度伝えるために  
今 瞳を閉じて  
今 瞳を閉じて